



第39号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30
TEL (052) 411-5301
FAX (052) 411-5341

親鸞聖人七五〇回御遠忌

法要に参拝して

秋田宗和

去る四月二十五日、廣讚寺さんのお誘いで親鸞聖人七五

〇回忌法要に参拝した。聞けばこの法要は五十年ごとに関
かれる仏事で、先回の法要は一九六一年であったそうであ
る。このことは、成人として聖人の法要に参拝できるのは
人生で一度限りの一大行事ということになる。今回その法
要に出席できることは千載一遇のチャンスと思えた。

思えば、人生六十有余年。親鸞聖人については文庫本を
一読したのみで、真宗の仏事について何一つ知らぬままの
日々であった。ありがたいはずのお経の意味さえ何一つ理
解していない。そんな小生にも聖人のご遠忌法要参拝の機
会を得ることができた。

道中バスの中では正信偈のCDが流されたが、初めて聞
く節回しで、聞き慣れたお経とは異なり、少し心細くなる。
観光バス二台で名阪道から第二名神経由で一路京都へ。第
二名神は初めての小生だが車窓の山並みも結構新鮮で楽し
かった。本山へ上る前に東寺を拝観した。東寺は桓武天皇
の命により、仏教学問所として開かれ、後に護国寺とされ
た由緒あるお寺とのこと。

午後、本山到着。いよいよ法要の始まり。内局事務長さ
んの話や皮切りに、大谷門主のお話や講話と続き、最後に
参拝者と檀家寺による正信偈唱和。

世界一という木造伽藍がらんに朗々と響き渡る正信偈に浸り、
ただただ聞き入るのみ。じつとしているだけで体の芯まで
染み通るような感慨を覚えた。正信偈が終わって、これが
本山の仏事の一つかと甚だしく感銘した。宗祖親鸞聖人、
中興の祖蓮如上人へ、そして今日まで脈々と伝えられてい
る真宗精神の揺るぎない伝統に浸り、しばし無言。七五〇
年の時空を超えて、親鸞聖人の偉大さに思いをはせ、帰
りのバスに乗り込んだ。合掌。

宗祖の遺徳を偲びつつ

村上三智雄



寒かった。本山の用意した膝掛けと廣讚寺さんからのホカロンがなかったら、きつと風邪をひいていたのでは？ 天気の変遷で雷雨が御影堂に入るまで続いていた。午後二時から法要が始まるころには雨も上がり、今度は全開の左右と後ろの出入り口からヒューヒューと冷たい風が堂内を吹き抜ける。最初はいす席でと喜んでいたのもつかの間、足元がスースーして冷えてきた。そんな中に宗歌を唱和して、

本山内局のあいさつ・東日本大震災被害支援の表白を朗読・高校生の感想文発表に岡崎教区の渡辺晃純氏の法話が続いた。これも大震災の話が中心で、命の大切さと念仏を唱えようと言ってられることしか聞き取れなかった。席が幸運にも最前列中央で須弥壇の中の御真影を拝眉することができた。須弥壇の仏華やお華束は作った者でない



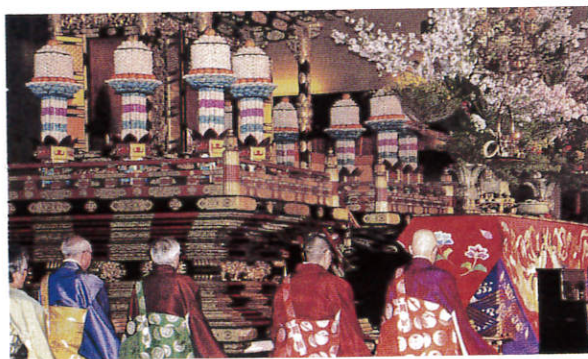


分らないほど豪華なもので、法話のときれた時に見ほられていた。そして待望の同朋唱和が始まる。毎月例会で紹介されていた通り、内陣の僧侶が導師となりゆっくり丁寧唱和する。隣の方につられ大声でやってしまっ

たが、堂内三千人以上の大唱和の響きにジーンとくるものを感じる。廣讚寺・同朋会の皆様とともに本山に来て同朋唱和した感動は一生忘れない。

四月も下旬なのに寒かった宗祖の遺徳をしのびつつ自分の五感の劣えを同時に感じた。

南の阿弥陀堂に参り白州に出る。約八十人の団体は休憩が入ると集合が大変だ。帰路のバスでは寺からの差し入れの酒をよばれ、ほろ酔いに心の中で「皆さん連れてきてくださってありがとう」と念ずる。



親鸞聖人の七五〇回御遠忌、本山に御参り。

朝のすがすがしき。おこないもよく心がけもよい……！
 それが一日の中で「天変地異」がおきたような空模様。口
 をついて、親鸞様いからないうでこまってしまふ、今日のこ
 の日なぜですか。

思つてごらんこうであらねばと思つてしまふから。心に
 収まらない知つたかぶりして、それでも背伸びしたくて、
 それで良い良いと言つていらつしやるような、いつもそこ
 にいてくださるやすらぎに。

親鸞聖人様もつと多々の時間をにらめっこしたか
 った。向かい会つて見ていたかった。静かに座つて、そし
 て板間でごろつと横になりたい。

南無阿弥陀仏をとなえ、限りなく並ぶはじっこに立つて
 ます、私も。

晁雅

【行事予定】

六月十一日(土)七時半 同朋会(役員は七時)

十九日(日)二時 学習会

二十八日(火)十時 二十八日講・女人講

七月九日(土)七時 同朋委員会・例会

十九日(日)二時～四時 学習会

●納涼大会●

二十四日(日)六時半 納涼大会

人形劇

金魚すくい・輪なげ・

ビンゴ大会など…

楽しい催しものがいっぱい。

どなたでもご参加ください。

(雨天決行)

二十五日(月)九時 後片付け

二十八日(木)十時 二十八日講・女人講